

科学は、人間が見、聴き、触ることのできない、感覚知覚の向こう側の世界を明らかにする。

技術は、人間の身体能力の限界を押し広げ、その知覚世界を拡張する。

芸術は、無限に広がる世界の美しさを人々に伝え続ける。

自然是無限に多様な姿を持っている。

そのほんのごくわずかな一部を、科学、技術、芸術はそれぞれの方法を用いて、人々へと伝え続ける。

わたしたちは、繰り返し、繰り返し、自然のその多様な物語を次代へと伝え続けてゆかなければならぬ。

REPORT

FORUM ON INTELLECTUAL UNITY 2006.08.30

第1回 次世代文化フォーラム ~アート・テクノロジー・サイエンスの領域を越えて~

UNIFICATION OF HUMAN INTELLIGENTS PROJECT

財団法人国際文化交流推進協会

第1回 次世代文化フォーラム ～アート・テクノロジー・サイエンスの領域を越えて～

科学的知性と芸術的感性の統合による21世紀の新たな知のあり方を問う

拡大、細分化し続ける現代知。環境、エネルギー、人口増加、国際紛争など、複雑な問題を抱える21世紀のグローバル社会に、いま全体像をトータルに捉えることのできる複眼的視点が求められています。

2006年8月30日に東京大学安田講堂に於いて実施した『第1回次世代文化フォーラム～アート・テクノロジー・サイエンスの領域を越えて』では、20世紀の科学、技術、芸術文化がいかに相互に関連し合いながら、各々の分野の革新的創造性を発展させてきたかについて、イギリスよりお招きしたアーサー・I・ミラー氏が基調講演演説を行いました。続く第2部では、わが国の科学、技術、芸術界を代表する有識者が、なぜいま、科学的知性と芸術的感性の統合が求められているのかについて、パネル討論を行いました。当日は約300名の参加者が集いました。本レポートは、そのディスカッション内容の要約をご紹介いたします。



第1部

Screening :

クロノスカルテット「サン・リングス」からの抜粋

Keynote Speech :

アーサー・I・ミラー氏

ロンドン大学科学・技術研究学部 科学史・哲学科名誉教授

(講演内容は別添フォーラムのプログラムを参照のこと)



第2部

Address :

小宮山宏氏 東京大学総長

野依良治氏 理化学研究所理事長

Panel Discussion :

黒川清氏 日本学術会議会長

立川敬二氏 宇宙航空研究開発機構理事長

石井幹子氏 照明デザイナー

鵜山仁氏 新国立劇場演劇部門芸術参与

逢坂恵理子氏 水戸芸術館現代美術センター芸術監督

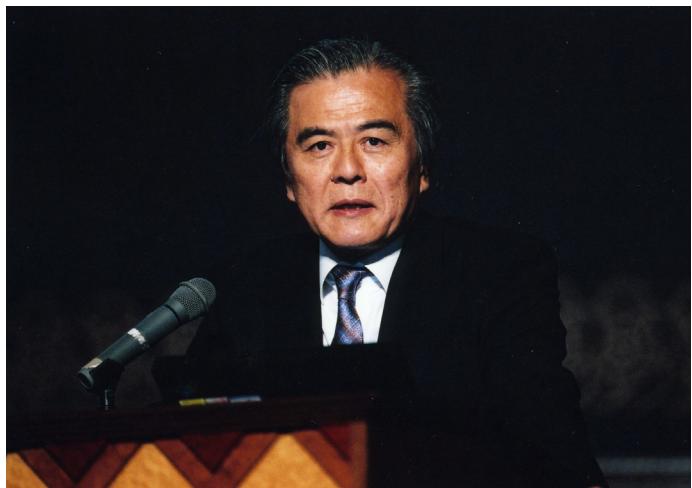
モデレーター：小出五郎氏 科学技術ジャーナリスト会議会長

§ ご挨拶演説

東京大学小宮山総長：今日は安田講堂では大変めずらしいイベントを企画していただきまして、ありがとうございます。最近、アートとサイエンスを考えていこうという機運がずいぶんいろいろな場所で盛り上がっているような気がしております。こういった背景を考えてみると、サイエンス自体が統合感を失ってきているという面がひとつあると感じております。

20世紀の間に膨大な知が生産されたということ、私は20世紀は知識の爆発の時代であるという言い方を時々しているのですが、この現象というのは、実はあらゆる分野で起こっておりまして、それがどんどん専門化する、専門自体が他との融合どころか孤立していく。そういうことが起こってきて、サイエンス・テクノロジーの中でも、少子高齢化とか、エネルギーの問題とか、持続性の問題といったような包括的な問題に対してなかなか対応できないという問題が生じているのだと思います。このことが大学の教育にとっても大いなる問題を生じていて、若い人はいわば知識の洪水にさらされているという状況にあるわけです。君たちは知識の洪水に流さるなということを言い続けておりまして、言っているだけでは可哀相ですので、いろいろなことをやっています。それを私たちは知の構造化と、呼んでいるわけですが、これは融合という話とまったくその目的意識に於いて同じ話なのです。例えば、東京大学では教養学部に入ってくる1、2年生に学術俯瞰講義というものを始めました。研究の方では、学術統合化プロジェクトという試みをやっています。これも細分化してしまって全体像を失っている我々自身が、いかにして全体像を回復するか、そのための大学としての試みでありまして、それをさらにというか、もしかしたらサイエンスとアートという方が、今度は人間の感性というものを通じてより結びつけやすいのかと。いずれにしても人間が自らを取り戻すという21世紀における大きな流れがあるのではないかということが、今日の集まりの背景にあるのかな、ということをかわきりに挨拶をさせていただきました。

理化学研究所野依理事長のご挨拶演説は、ご本人様のご都合により割愛させていただきます。



§ パネルディスカッション

小出氏：今日のキーワードの言葉はダビンチかな、というふうに思います。万能の天才といわれるダビンチです。今の社会、そして未来の社会を考える時に、ダビンチ的な人、つまり芸術・科学の両方に通じてものをトータルに捉える人がやっぱり必要なではないか。もしそういう人が今いないとしたら、どのように育てていくか、その点から皆さんの日頃の仕事・立場も踏まえて、一言ずつ発言していただきたいと思います。

黒川氏：もともと科学とアートというのは同じことを見ている、同じことの同じ気持ちの表現形であって、その表現形が違うだけだと私は思っている。最近こういうことが話題になってきているのは、日本は科学技術立国と言っても本音は、ここ60年、科学技術の投資は経済のエンジンだなんて言ってきたのではないか、ということなのです。けれど、なんかおかしいと感じ始めたのではないか？つまり、経済とかお金の話ではなくて、もっと根源的に科学をする心、アートをする心、なにももっと純粹という訳ではないけど、科学の本質とは違うのではないかと皆さん気がつき始めのでは、と思います。科学とは、という問いかけに対して、価値そのものにズレがある、と皆感じてきている。さっき東大でもやり始めたと言っていた

けれども、今までの東大がやっていた学問は、知的好奇心というか、美しいものが必ずしもプライオリティが高くはなかったのではないか。皆やはり基本的には人間だから感じているんじゃないかな、と私は思います。

逢坂氏：「ブリッジ・ザ・ギャップ」という言葉があるように、細分化してしまったいろいろなジャンルの橋渡しをして、人間として21世紀をどのように生きてゆくのかを考えるべき時だと思います。ひとりの人間がダビンチのように全てのことを網羅する時代ではない。けれども、それぞれの分野で活躍していらっしゃる方々の連携が、新たな価値観や新たな表現を生み出し、人間社会の優れた部分を推進していくことに繋がってゆくでしょう。ギャップに橋渡しをしようとする意思をもった人々の協働が機動力になっていくのではないかと思います。一人よりもチームワークで橋をかけることが、これからどの分野にも求められていることだと思います。

立川氏：私は前にドコモの社長をやっておりました。ビジネスとアートを結びつけようという動きが2004年にあり、世界のビジネスマンと芸術家を集めた議論をフィンランドでやったことがありました。その時の私の印象としては、やはりこれまで芸術と科学が少し分離しすぎてきたかなと。世の中がそういう新しい動きを生

み出そうとしているのではないか、という印象を受けたわけです。私もいろいろとお話をしましたけれど、その時の感想は、ビジネスの世界でももっとアートを考えるべきだろうと。なぜかというと、先ほども話がでておりましたが、やはり芸術の意味するところは感性だろうと思います。ビジネスでもやはり感性は大変重要です。ドコモの例で言えば、携帯電話の機能、サービスを考える時にやっぱり相手は人間ですから、人間のことを考える必要がある。それはどこから生まれるかというと、感性から生まれるだろうと。ということでお、私もぜひ知性と感性の融合が必要であろうなと。融合をひとりの人間できなければ、いろんな人間の組み合わせでやればいいんではないかと思います。

石井氏：私はダビンチみたいな人がなぜ日本にいないかと思うとですね、これはもう当たり前のことなのですが、言ってみれば明治以降、日本は西欧にキャッチアップしていくことに大変一生懸命であった、そのためにはできるだけ専門分化して、専門家をいっぱい育てることの方が早くキャッチアップできるということに国的基本的な教育の方針があったんだというふうに思います。ですから、私の若い頃なんかはですね、アート・デザインに対しては非常に風当たりは強かったです。要するに画家になるとかアーティストになるということは大変悪いこと、ようするに進んではいけないような道、異端な道というふうに考えられていた時代がずっと長くあつたのではないかと思います。そういうところで、なおかつ今も私は決してその状況を楽観している訳ではありません。例えば小さい子供達や小学生の子供達に絵を描くとか、音楽を学ばせる、そういう時間がどんどん減っている訳ですね。そういう一番感受性の豊かな時に、芸術の教育をちっともしなくなっている時代に一方では入っているのではないか。そういうところでダビンチを求めるというのはまったく矛盾した話ではないかと私は思います。

鶴山氏：『コペンハーゲン』という芝居をたまたま僕は2001年に初台の新国立劇場で演出したのです。先ほどからミラー先生のお話の中にも出てくるベルナー・ハイゼンベルクとニールス・ボアという二人の物理学者が、1941年にコペンハーゲンで出会った。ハイゼンベルクによる謎のコペンハーゲン訪問と言われている史実があるんですけど、それについてマイケル・フレインというイギリスの作家が書いた芝居の演出をしました。たまたまそういう縁でここにいます。で、ダビンチの話に戻ると、先ほどから知を俯瞰する、統合するという言葉が出てきて、なるほどそうだなと思ったん

ですが、これ程多岐にわたって錯綜している世界を解析するというか、言語・・・非常に多岐にわたっている言語をわかりやすい形で統合する言葉の使い手、そういう意味でのダビンチの出現が待望される、劇場がそういう共通言語が集まつてくる場所になればいいのだが、ということを思いつつ、別に固有名詞としてのレオナルド・ダビンチでなくてもいいんですが・・・そういう場とか言葉、哲学の出現を心待ちにしているところがあります。

小出氏：『コペンハーゲン』のお話が出てまいりましたが、ニールス・ボアとベルナー・ハイゼンベルクの会合、これはかなり有名な科学的談話ではあるのですけれど、これをアートというか舞台という形で鶴山さんが舞台化されたその心というのは何でしょうか？

鶴山氏：要するに、立場が違えばものの見方が違う。人間には様々なものの見方、考え方、何をどう考えるかについて様々な動機があって、単純に一筋縄でこれを規定することはできない。ある種、相補性であるとか、不確定性であるとか、そういう物理学の言葉を人間関係の複雑さに見立てたというのが作者のマイケル・フレインの発想で、これはライブのアートとしての演劇の特徴・面白さと相通ずるところがあるわけです。

小出氏：物理学の用語としてはかなり難しいことがあるわけですけれども、お客様は理解されました？

鶴山氏：そうですね、例えばせりふで言うと、「私は先生の敵である」と、これはハイゼンベルクが言うんですけれど、「先生の敵であつて友人でもある。人類の脅威でもあって来客でもある。量子であつて波動でもある」と、こういう表現が出てくる。また、「われわれは世界に対して義務を負っていますが、それとは決して相容れない他の義務もあります。祖国、友人、家族、子供たちに対する義務があると。私たちは二つではなく、22のスリットを同時に通り抜けなければならない」と、こんなことも言うんですけども、こういう表現をどのレベルで理解し、楽しむのかということについては、それこそ様々な観点からのアプローチが可能ですよね。

小出氏：物理学で使われている言葉の普遍性から、また新しいイメージが浮かんでくると、それもひとつの狙いだったわけでしょうか？



鶴 山氏：その考え方、哲学、科学的真実を、人間的真実とどこでどうやってつき合わせていけるのか、ということが我々にとってはポイントなんじゃないかと。

逢 坂氏：20世紀になって物理学から引き出された複雑さというのは、知の領域で認識してきた要素が非常に強いですが、実はアートの世界も、相矛盾するものの共存や、非常に曖昧な、複雑なものが入り組んでいる物理の世界に通底するものがあると思います。また一見科学とは無縁なようでも、それぞれの時代に、アートの背後には科学技術や自然に対する解釈というものがいつもありました。20世紀後半は、例えばソニーが小型ビデオを開発したことによって、ビデオアートというジャンルが生まれ発展しました。コンピューターや光ファイバー、携帯の出現によって、21世紀はさらに新しい技術に触発された作品が出てきています。

小 出氏：観に来る人達というのは、やはりアートとサイエンスの融合というようなことを感じているのでしょうか？

逢 坂氏：若い人にとっては、科学かアートかのジャンル分けはあまり重要ではないんです。それよりも、今生きている私たちの時代の知と美を融合させたものを、どのように楽しめるかの方がアピールする気がします。

小 出氏：むしろ、脳のそういう部分を刺激することによって、より新しい世界を創造してゆくことに繋がっていくのかもしれません。

逢 坂氏：そうですね。そのことによってまた科学というものが逆に身近になっていくのではないかと思います。回路の違うところからアプローチすることによって、科学の分野とアートの分野を切り離していたものをつなぐ回路が出来るのではないかと思いますね。

石 井氏：私は光をデザインというアプローチで使っております。では、デザインとアートはどこが違うのかという疑問を持たれるかもしれません、決められた条件の中でものを作るということがデザインというふうに私は考えております。予算があって、工期があって、そして与えられた条件の中で精一杯作るということがデザインで、それを私は光を使いながらやっております。新しい、最先端の光技術を使いながらものを作っていく、それも公共的なものが多いので、出来るだけミニマムなコストでランニングコスト、電気代も出来るだけ少なくしていきませんと、実際に電気を消されてしまうということといつも闘っております。私が初期の頃にやりま

した横浜のベイブリッジは上の方が1時間に2回だけ青い色に染まりますが、このフィルターを開発するのに約半年かかりました。要するに、太陽光線で退色しないとか、様々な要因をクリアするための開発をしましたが、これなんかも出来上がった絵を描くのは極めて簡単なんですが、現実にこういうことをやっていくには様々な困難が伴います。何か新しい技術が生まれてきますと、それを使って新しい表現をしたいというのは、これは私いつでも考えていることで、最初何かをやるのはなかなか難しいですね。もういろんなことをクリアしていくなければならない。そしてそれを予算とスケジュールの中でやるという、まあそういう困難な仕事をやっております。何が目的かと言いますと、人の心に響く、あきれいだな、こういう時間にこういう場所でこういう綺麗なものを見て幸せだと、そういうふうに一人でも多くの方に思っていただきたいと、それが私の仕事の目的です。

小 出氏：鶴山さん、逢坂さん、石井さんからアートの世界で科学技術の成果をいろいろと取り込んでいる、具体的に融合している例を見せてもらいましたが、いつのまにか大変な勢いで、新しい世界が出てきている。具体的な融合の例が広がってきてていると思うのですが。

黒 川氏：今日、3人の方からいろいろ映像を見せていただきましたが、私たちがそれを感じているのは脳なのですね。脳は外の世界からのインプットをどのように理解し、何らかのアクション、考え等として表現する、あらわす。知覚とか、味覚とか、見るとか、その他に話す、動く、みんな何らかの刺激がインプットされているわけです。人間が他の動物と違うのは、話すということと、そして書くということがだんだん出来るようになってきた、ものを作ることも出来るようになった。数学は何かというと、これは計算する学問ではなくて、生まれつき皆さんを持っている「数と時間と空間」を感じる能力を、今までの経験から自分たちの中でもう一回、共通に理解して、生活の知恵にし、相手に知恵や知識を伝える方法なんです。例えば、この間たまたまアフリカへ行ったのですが、肉食動物はある群れの中から、ある一頭を選んでそれに目標を定める。一つ、「数」です。それからその標的への距離を測ります、「空間」を測定しているわけです。それで自分で追っかけてどの程度の時間でどこまで行けるかということをちゃんと計算している。動きながら。これは「時間」ですね。それをもうちょっと理論化、普遍化、数式化していくというのが人間です。4000年前のエジプトを考える



と、土地の面積とか、太陽の1年間の動きもそうだけど、ずっと観て、考え、それらを記録しているわけです。だから、ギザのピラミッドも底辺は正方形で四辺がちゃんと東西南北に向いている。そういうことを全部観て、記録し、計画し、実行できる知恵と知識があるわけです。それがこれまでお話した、いわゆる「インディジナス・ナレッジ（土着の固有の知識）」と繋がってくる。そういう知恵があるのが人間だなと思います。

さてそこで、話す・書くということで相互にコミュニケーションするけど、それは、根源的な感動、知識、知恵をどうやって表して共有してゆくか、というエクササイズをしてただけの話であって、もともと人間にとって根源的なクエスチョンというのは同じなんですね。例えば、子供は生まれつき科学者なんです。子供さんがお母さんを見て「なんで夜はくらいの」と聞く時、お母さんなんて言いますか。「そんなの当たり前じゃないの」なんて言っているようでは子供に科学的好奇心が育つはずがないわけで、大人が科学離れをしているから子供も科学離れになる、と言う事です。私はアメリカに15年もいたからそれを感じたんだけど、子供にピアノを習わせる時、あっちの教え方を見ていると、譜面の通りに弾くことは教えません。ある程度は必要だけど、これはどういう気持ちで書かれているのか、ということを子供に説明しながら、教える、それで弾いてみせる。楽器は、音楽家が表した気持ちをどうやって感じるかのツールに過ぎないのであって、そういうような教育システム、社会システムがあったのかなということを日本はちょっと反省しているのではないかかな。子供は生まれつき好奇心の塊ですよ。子供の「なぜ？ どうして？」に大人がどう反応するかで子供はどんどんどんどん変わっていく。われわれは皆ワンパターン化しているということで、なんかおかしいのではないかと思います。

立 川氏：逢坂さんや石井さんの実際のアートを見せていただいて、現代技術をよく活用しておられるなと感心しました。こういうことをもっと活用して世の中の人々にアピールしていただくと、現在の技術というのもより多くの方に分かって頂けるんじゃないかなと。そういう意味で大変いいなと思います。個人個人はやはりアートに対する関心があるので、黒川先生は人は子供の時から科学者だと言いましたが、人類は子供の時からアーティストでもあるわけですよね。そのアーティスト精神をどうやって伸ばしていくか、というのは少し考えた方がいいかな、と思います。現実問題として、伝達するために何が使われてきたかというと、従来は話すことだったんです。だけど、人間は確かに黒川先生おっしゃるように、視覚情報が大変多いんです。人間は大体7割くらいは視覚情報で動いていると、こう言われています。だけど、人間にはせっかく五感があるわけでしょう。これを使わないのは勿体無いというので、コミュニケーションの世界でも視覚、聴覚だけではなくて、当然嗅覚や触覚や味覚もやったらどうかと、これを遠方に伝達するのがコミュニケーションなら、他の感覚もぜひ伝えたらいんじやないかというんで、研究所の連中にそういう研究をやれとゆうことを言っています。そういうふうに新しい技術は出て来るわけ訳ですから、うまくそれをアートとして大いに使っていただくといいなと、今日映像を見ての感想です。

鶴 山氏：多様化していくというのは大変いいことだと思うのですけれども、一方で先ほどお話があったように、人間の脳のキヤパシティというのは本当に限りがあるのかないのか、いろんな楽しみ、情報を教わる一方で、パソコンやワープロを使っていて漢字が

書けなくなっている自分がいるわけです。

石 井氏：何万種類という人工の光がありますが、やっぱり一番人間が感動する光というのは、私は一本の蠟燭の炎ではないかというふうに思います。燃えている火、こう手をかざせば温かい、こういった光の原点が持つ五感を通しての光を浴びる、光を感じるっていうのを、それをやはり大事にしていかなければいけないのではないかと思います。そのツールはツールでいいけれども、やはり人間の本来の五感をいつも健全に取り戻して、人として幸せに生きていくことを忘れないために、アートとテクノロジーとサイエンスの領域を越える、ということの意味があります。やっぱり原点は人間の生身の五感にあるということを忘れないで欲しいと思います。

立 川氏：私が60何年生きてきてこの頃心配しているのは、あまりにも画一的教育になりすぎて、折角の子供の科学者、アーティストが大人になるとすぐに駄目になるということです。宇宙の例で言うと、子供は大変関心があるんですよ。だから子供さんはいいんだけども、これが中学へ行き、高校へ行き、大学へ行くと、だんだん宇宙なんて関係がなくなってきて、就職した時には殆ど関係ない。そういう状況になっちゃったということですが、そこで一番の問題は、私は画一的な教育になって、みんな受験勉強やって、大学へ行くのも単に大学へ行くためにやっているという感じになったことを心配しております。そういう意味では、このアーツの分野をもっと推奨することによって、やはり人間の感性を尊重するような社会になって、我々科学の分野でも可能性をいろいろ追求するような自由さをぜひ育てていってもらいたいなと。私は最初に申し上げたように、科学と芸術のつなぎ役を考えたいと思っておりますので、そういう観点から見ると、やはり人間の可能性をもっと追求できるような社会にぜひ日本もしたいな、と思います。

逢 坂氏：先ほどお見せした作品は20世紀の新たな技術に裏づけされていますが、本来アートというのは新しい技術を誇るものではなくて、その背景にあるアーティストが表現する思想、複数の視点や考えを示していくものだと思います。ですから、アートの役割というのは皆さんのお発言と共通しているように、やはり人間の傲慢さや、可能性、自然に対する敬意の念、それから創造に対しての様々なアプローチ、そういうものを気づかせることもあります。また、21世紀の社会で地球人として、国を超えた共通の認識として、様々な問題を解決していくための糸口を見つける手立てのひとつがアートだと思います。そのためにはアートの分野だけでなく、様々な分野と橋渡しをしながら、アートの持つ複眼的なものの見方、他者の存在への理解というものを学んでいくといいますか、知覚していく、認識していく、ということが大切ではないかと思います。

黒 川氏：インドで育ったラマンって人がいる。たまたま30歳の頃に地中海へ行くことがあって、その海の青い乳白色（オパレッセンス）、その海の光ですごく感動する。それで帰国した後、どうしてああいう光なのかなっていうことをいろいろ考える。感動をどういう形で表すかというのは人によって違うわけで、そのセンスをどういう風に焼き付けていくか、これはテクノロジーではなくて、自然との接し方と感動する「こころ」です。そこで感動するんですね。彼はラマン効果を考え出して1930年にノーベル賞をもらうけど、そういう感動を生むようなものは人間にあって根源的なものだと思います。それがあまりにもテクノロジーになっているのではないかって気がするんです。来月来られますけど、イギリスのロイヤルソサエティの会長マーティン・リース、宇宙学、天文物理学者です。彼

は21世紀はテクノロジストは極めてあぶないと。なぜかというと、テクノロジストはどんどんテクノロジーを進めていくことが使命ですから。テクノロジーをやる人は、いったい何のためにやっているのかというのを見なくなってしまうことがある。クルトワイルという未来学者は、恐らく20年～30年以内に今のバイオテクとナノテクとロボテクスからいうと、ものすごい小さいチップで、これを脳にちょっと入れると教科書に入っていることがみんな理解できるという時代が来るだろうと書いています。そうなると、人間の感性とはいっていい何なのかということです。ナレッジ・ベースド・ソサエティ（知識社会）で知識は何処にでもあるんだけど、知恵はどこにいっているのか、これが今一番問われていると思います。

私たちの世代はどういう世界を次の世代に残していくのか。そして、現在何が起きているか。たとえばアフリカに4千万人のエイズの人がいるって知っている。みんな知っていて何のアクションも取らない、出来ない理由ばかり並べて。ということなどが、これから成人して50年先に残る世代に対する私たち世代の一番の責任です。僕らの多くはたまたま人生の大部分を20世紀に過ごしたけど、どういう世界を残すかというのは僕らの一番の責任だと思います。だからいま出来ることは少ないかもしれないけど、一人一人が少ないアクションでも、ひとつひとつそのステップをよく考えて行動していけば、コレクティブなワイスマ（集合的な知恵）がでてくるだろうと思います。

サイエンスもアートも実に楽しい話なんですよ。感動を与えるものは、やることも楽しい。一方でテクノロジーがどこまで進んでいくかということを正当化する動きは止められないと思います。次の世代にどういう世界を残していくかということはものすごく大事なことです。それを皆薄々感じているから、アートとサイエンスっていう話が最近出てきた。人間の本質は何なのか、ということだと思います。

小 出氏：T.S.エリオットの詩の一節に、「知識はどこへ行ったのか。情報の中に失われてしまった。知識はどこへ行ったのか。知識の中に失われてしまった」というのがあります。私たちの知識は増えたけれども、知恵をきちんと生かしていない。これから時代、知恵を働かせることなしに科学技術の成果を、未来の豊かで幸せな人類社会を実現ということに結びついていかないのではないか。その知恵をどうやって生み出していくのか。科学とアートの融合、理性と感性の融合もあるでしょう。ひとりひとりの生活というレベルに落としても、それなりにやることはあろうかと思います。そういうことを踏まえて、楽しくて幸せで豊かな人類社会をぜひ、築いていきたいというように思います。

このレポートは、2006年8月30日に開催された『第1回次世代文化フォーラム～アート・テクノロジー・サイエンスの領域を越えて～』を採録・編集したものです。

§ 第1回 次世代文化フォーラム

～アート・テクノロジー・サイエンスの領域を越えて～
開催概要

開催日： 2006年8月30日（水） 14:00～17:00

開催場所： 東京大学安田講堂

主催： 財団法人国際文化交流推進協会

日本経済新聞社

助成： 財団法人東芝国際交流財団

協賛： 高砂熱学工業株式会社

トヨタ自動車株式会社

後援： 内閣府

文部科学省

日本学術会議

独立行政法人理化学研究所

独立行政法人宇宙航空研究開発機構、

独立行政法人国際交流基金

NHK

ブリティッシュ・カウンシル

科学技術ジャーナリスト会議

社団法人日本芸能実演家団体協議会

協力： 株式会社ニュートンプレス

日経サイエンス

埼玉県和光市

株式会社カンバセーション・アンド・カムパニー

認定： 社団法人メセナ企業協議会

§ アンケート回答：191名（回答率63%）

アンケートには事前・事後を含めて191名が意見を寄せて下さいました。事前アンケートの「フォーラムに寄せる期待」の回答として、学際的交流による文理の融合を期待する、新しい文化、価値観、方向性などの提示や知的刺激を期待するという意見が大変多く、次代の新しい価値の創造に非常に高い関心が示されていました。事後アンケートでは、数名の方から河合長官の話が聞けなかったこと（健康上の理由から欠席）、そして時間的な制約を残念に思うとの意見をいただきましたが、回答者の約7割がプロジェクトの今後の持続的発展に期待を寄せており、主体的に関わりたいとの意見も多数見受けられました。

Demographic Factor

男性	189名	63%	20代以下	41名	21%
女性	81名	27%	30-40代	41名	21%
			50-60代	60名	31%
理系	77名	40%	70代以上	11名	6%
文系	101名	53%	回答なし	38名	20%
その他	13名	7%			

発行： 財団法人 国際文化交流推進協会（エース・ジャパン）

〒107-0052 東京都港区赤坂1-11-28 赤坂1丁目森ビル4階

TEL: 03-5562-4422 FAX: 03-5562-4423

URL: www.acejapan.or.jp

編集： 伊東はる奈